

『賃労働と資本』を学ぶ

第12回 四国ブロック

連載を終えるにあたって

司会11年間、苦勞様でした。テキストの学習は最後の五章まで終わりました。

12月号掲載の内容については、第1回目に、「学習にあたって」の問題提起をされたYさんに、まとめ的に、この連載を終えるにあたって、『賃労働と資本』の今後の復習や、『資本論』への挑戦への心の準備となる「補強」の提起をしていただき、終ります。

『賃労働と資本』の内容の

要点を再確認しよう

Y11各章の内容については毎月の学習の中で、その要点は、ほぼ理解できたと思います。今後の復習にあたって、

この間の学習を思いおこし、その要点は何だったのかを再確認することが大切です。そこで、参考までに、私の掴んだ『賃労働と資本』の各章の要点を簡潔に述べてみたいと思います。

第一章「労賃とは何か？ それはいかにして決定されるのか？」では、労賃（賃金）は、資本家が買う商品であ

る労働力の価格、であることを明らかにしています。

第二章は、「商品の価格は何によって決定されるか」です。現象を捉えるとき、需要と供給によって決まるように見えるが、その需要と供給は何によって決まるかを明らかにして、それは、価値（テキストは生産費）によって決まると述べ、この章では、労働価値説と価値法則の考えが述べられています。

第三章「資本とは何か？」では、資本の歴史的性格を明らかにし、『資本論』の核心部分でもある剰余価値（テキストでは利潤）を、資本がどのよう

◆特集 みんなの学習講座

にして獲得するかを明らかにしていません。

第四章「資本の増大と賃金」は、三章の資本の剰余価値の搾取を前提に、資本の増大（剰余価値の資本への蓄積）が労働者階級におよぼす影響、資本と賃労働の利害の敵対的關係を明らかにしています。

第五章は、「生産的資本の増大と労働者階級」です。分業と機械化等による資本の生産力を高める競争は、資本の蓄積をさらに高め、それが労働者階級の運命にどう影響を及ぼし、また資本主義的生産様式に影響を与えていくか、が述べられています。この五章は、続きがありませんが、エンゲルスの「前書き」の内容等から、社会主義が必然的なものとなる客観的条件と変革の主体的条件が生まれることを示唆していると、理解することができます。

エンゲルスの「前書き」は、必読です。司会Ⅱ今の要点を聞きながら学習を思

い出して、もっと読み込まなければならぬと、復習へのやる気が高まりました。続いて「補強提起」をお願いします。

補強・1—労働と労働力の違い は資本の搾取を暴露する

YⅡ第一の補強は、労働者の最大の問題であり、貧困の原因である「賃金」についてです。搾取を隠蔽し、労働力の再生産費をも奪い取る資本の賃金攻撃を打破し、春闘を再構築するための思いをこめて提起します。

資本の労働者の賃金への批判は、マルクス経済学への批判であり、その主眼は、労働者と労働組合の賃金闘争を放棄させるためのものです。その俗流的賃金理論の基軸をなすのは、「賃金分け前論」または「生産性・賃金論」です。賃金が目で見える姿（現象）であることは、「労働に対する報酬」の

ように見えるという最も騙しやすい常識をとらえて、資本家は、知られたくない剰余価値の搾取を隠蔽するのです。

1) 賃金は、労働力商品の価格である。

このテキストの中で、マルクスは解りやすい事例で次のように述べています。亜麻布の生産に必要な原料と労働用具を持った資本家は、労働力を売る以外に生きられない労働者を見つけ、その労働力を買って亜麻布を生産します。だから織布工の労働力も、原料や労働用具と同じように、資本家が生産する前に買い取った商品です。また労働用具と同じように、生産物の価格の分け前には少しもあずからないのです。

2) 労働者の搾取を隠蔽する「賃金形態」も、賃金の本質を隠す

資本対労働の矛盾の根源は剰余価値の生産にあります。それはありのま

まには現れないで、様々な形態等によって覆い隠されています。なかでも最も重要なのは、労働者の労働すべてを「支払労働＝必要労働」として現象させる賃金形態です。例えば8時間の労働は、賃金部分の必要労働と剰余価値部分の不払い労働とに分けられます。したがって、全ての労働を支払労働として、賃金が支払されると、それは8時間の労働全てに対する賃金となり、搾取される剰余価値は隠蔽されます。したがって、この「賃金形態」は、「賃金分け前論」の考え方です。基本的な支払い形態には、「時間賃金」と「出来高賃金」がありますが、この二つの形態も、「賃金＝労働の代価」の考えです。このような、賃金の本質を隠す資本の狙いを打ち破り、労働力の再生産費としての賃金を、労働者の団結の力で闘い取る春闘の再構築をめざしましょう。

司会Ⅱそのためには、経済学の学習

賃金とは何かなどの基本的な学習は不可欠ですね。

YⅡそれでは次です。四章と五章では資本の蓄積が、賃労働と資本にどのような運命をもたらすか、具体的な蓄積の展開を述べています。そこでまず、資本の蓄積（資本の増大）とは何かを簡単に説明します。資本の蓄積とは、剰余価値の資本への転化のことです。それは資本の規模を増大しながら行われる拡大再生産のことを意味します。それは生産物の拡大再生産だけでなく、労働者も資本家も再生産されますので、資本の蓄積は、剰余価値の法則とともに資本主義的生産様式の絶対的法則であります。

四章、五章の補強は、その蓄積論をより深め、発展させた内容である、『資本論』第一巻第七篇第二十三章と二十四章から要点を取り出して、提起します。

補強・2

―(第四章) 資本蓄積論(1)―

1. 資本蓄積と資本の有機的構成
資本蓄積が労働者階級におよぼす影響の、その最も重要な原因となるのは、資本蓄積と資本構成の変化との関係です。それは、資本を構成する不変資本C(機械・原材料等の生産手段)と可変資本V(賃金・雇用等の労働力購入)の組み合わせ比率とその変化をとおして説明されます。「資本の構成」は、技術的構成(充用される生産手段の総量と必要な労働量との構成比率)にしたがった「価値構成」(生産手段の価値と労働力の価値との構成比率)としての「資本の有機的構成(CとVの比率・C/V)」で表現されます。まず、資本主義的生産における資本の競争は、「特別剰余価値」を求めて行われます。特別剰余価値は、他の資本家よりも一歩進んで労働生産性を上



若き日のマルクス。彼は1847年末にドイツ労働者協会の席上で労働者向けの講演を行い、1849年に『新ライン新聞』上で『賃労働と資本』としてまとめられた。

昇させることによつて得られるものです。それは商品の社会的価値と個別的価値との差額といえます。故に、資本の競争は労働生産性の競争です。かくして、資本蓄積も労働生産性の上昇をテコとして遂行されます。労働生産性の上昇は、機械化、技術革新等により、一人の労働者が一定の時間内に、同じ

労働強度で生産物に転化する生産手段量の増大となつて現れます。したがつて、生産手段量に比較した労働量は相対的に減少するのです。このような変化は当然、資本構成における不変資本の相対的増大・可変資本の相対的減少となつて現れます。この現象を「資本の有機的構成の高度化」というのです。

2. 資本蓄積と相対的過剰人口・産業予備軍

このようにして、資本の増大は必ず有機的構成の高度化と並行して進められていきます。したがつて、資本の増大はそれに比例する労働力需要の増大ではなく、一定額の資本が吸収しうる労働力は、次第に減少することになります。長期的・平均的には資本にとつて過剰な人口が生じるような形で蓄積を進めるのです。その結果、資本蓄積の進行とともに、過剰人口（失業者人口）が形成されていきます。それは、絶対的に過剰な人口という意味ではなく、資本が必要とする量に比べて相対的に過剰な人口という意味です。だから、「相対的過剰人口」または「産業予備軍」は、恒常的な大ききで存在するのではなく、景気が良いときはある程度までは資本に吸収され、景気が悪いときはより大量になります。

3. 資本主義的蓄積の一般法則

以上に述べたように、資本の蓄積が失業人口の規模を増大させるとすれば、蓄積に伴って労働者階級の状態は貧困が増大し、悪化せざるを得ません。よって資本の蓄積は、一方の極（資本家階級）に富の蓄積を、同時に他方の極（労働者階級）における、窮乏・抑圧・隷従・労働苦・搾取の蓄積があるのです。

このように資本主義の発展と共に、労働者の窮乏化、その非人間化は、資本蓄積の必然的法則として進展していきます。しかし同時に、資本主義の生産方法そのものによって、訓練され、結集され、組織された労働者階級の反抗も増大・蓄積されます。これが資本主義的蓄積の一般法則です。

かくして、資本主義的生産様式は、資本蓄積の進展過程のなかで、社会主義革命の担い手としての労働者階級を自ら生産してゆくのです。

補強・3

— 第五章・資本蓄積論（2）

1. 本源的蓄積とは何か

1) これまでの資本の蓄積論は、資本関係を前提にして説明してきましたが、資本関係という前提はどのようにして創り出されたかを、明らかにする必要があります。なぜなら、この点の解明によつてはじめて、古典派経済学者の言う、資本主義的生産様式が、歴史を超えた永遠自然の存在ではなく、資本主義的生産様式も「始原」があると同時に「最期」があるところの歴史的・経過的な生産様式として確定されることになるからです。

2) 「本源的蓄積」は、資本家と労働者の関係を、歴史的にまったく新しく創出することを意味します。それは、封建制の解体の過程で、土地、その他の生産手段を所有していた農民や手工

業者から、生産手段を所有する資本が暴力的に収奪して、彼らを自由な労働者に転化させて、資本主義は成立しました。

この資本主義的生産様式の出発点にある蓄積を、資本主義的蓄積に先行する「本源的蓄積」と名付けています。そして、その本源的蓄積によつて封建社会の生産的基盤を十分に分解させた時、資本主義的蓄積が本格的に展開され、また、資本主義的蓄積によつて、資本主義の最期も明らかにできたのです。それを、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」として次により明らかにしています。

2. 資本主義的蓄積の歴史的傾向

1) 生産の集積と生産の社会化

資本主義は、そもそも農民や手工業者などの直接的生産者から生産手段を奪い、生産手段と労働力を資本家の工場へ集積することによつて成立しまし

◆特集 みんなの学習講座

た。故に資本主義的生産は、始めから社会的性格をもっており、これは中世の農民や、手工業者による個人的生産とは異なる資本主義的生産の重要な特徴です。この資本主義的生産の社会的性格が、資本の集積・集中に伴って、ますます強められます。この資本主義のもとでの社会化は、社会主義のための物質的前提条件をつくりだしますが、それ自体なくす的に社会主義をもたらずにはありません。

2) 収奪者が収奪される

資本の蓄積とそれに伴う資本の集積・集中は、資本の巨大化を進めますが、それは同時に、同一資本のもとに集中される労働者数が巨大になることを意味します。彼らは工場の中で、組織的な協業・分業体系に編成され、厳格な統制にしたがって労働することを強制される中で、組織性と規律性とを身につけていきます。故に、資本の蓄

積は、一方では巨大な資本を創り出し、他方では組織性と規律性を持った労働者大衆を創り出します。

こうして資本の蓄積は生産の社会化を推し進めて、社会主義のための客観的・物質的な条件を創り出すと同時に組織され、訓練された労働者という社会主義のための主体的条件をも創り出すのです。

本源的蓄積期において資本主義は、農民や手工業者などの直接的生産者から生産手段を収奪することによって成り立ちました。ところが、資本主義的蓄積の歴史的傾向は、生産の社会化を推し進める一方、労働者という資本主義の墓掘人をますます強大なものにして、収奪者が収奪されることを不可避にします。この「収奪者の収奪」とは、資本主義的生産関係を根本的に変革すること、つまり生産手段の資本主義的私有を廃止することです。それは、生産の巨大な社会化に適合した生産手段の

社会的共有を基礎として、諸個人の個性の自由な発展を保障しようとする生活手段の真の個人的所有をつくりだすことです。

司会IIありがとうございました。この学習講座がきっかけになって、『資本論』にチャレンジする仲間が一人でも多く出てくることを期待しています。

お詫びと訂正

11月号の本講座45頁中段16行目「資本主義的外被とは調和しえなくなる。一点に到達する」とありますが、正しくは「資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する」(『資本論』、岩波文庫、第3分冊415頁)です。『』は不要です。

お詫びの上、訂正いたします。